

第76回愛知学院大学モーニングセミナー

「無常の世を生き抜く力を

『**方丈記**』から学ぼう」

—2012年は「方丈記」執筆から800年—

愛知県立大学 日本文化学部

教授 伊藤 伸江

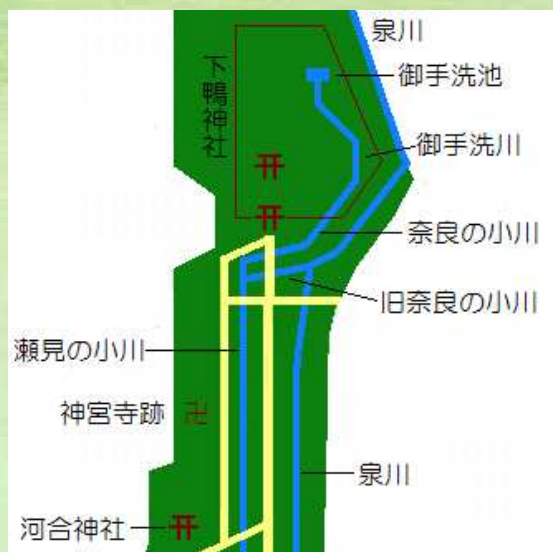
2012年7月10日



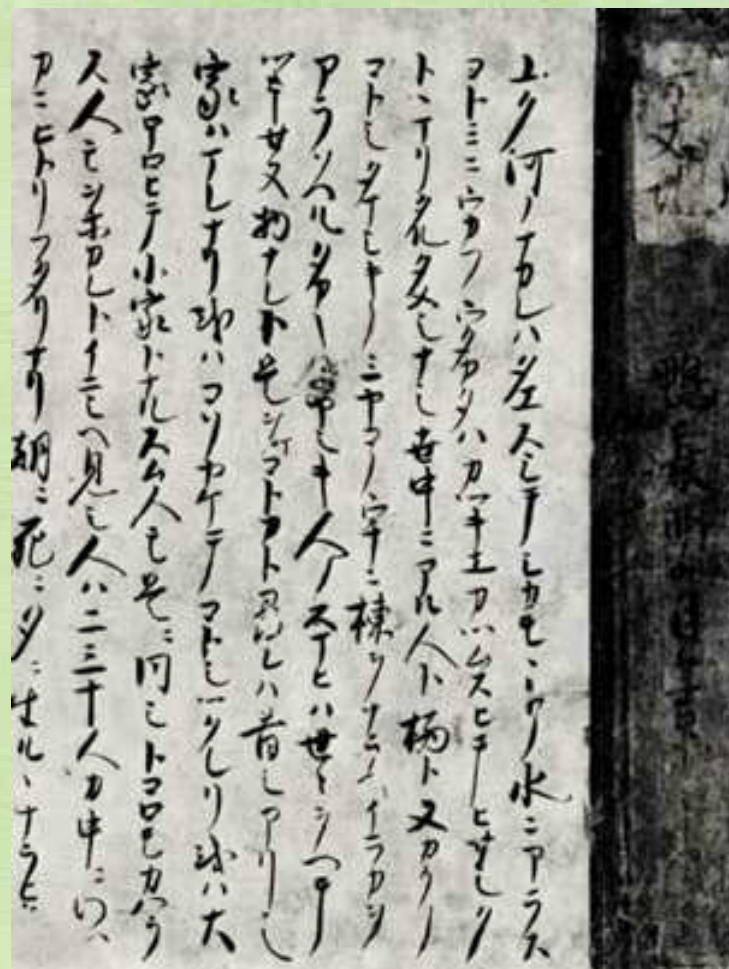
下鴨神社を流れる瀬見の小川



伝土佐広周画
「長明法師画像」
(神宮文庫蔵)



河合神社



大福光寺本『方丈記』写真(冒頭及び形状 (卷子本))

方丈記

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。

よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。^{ためし}世の中にある、人と栖すみと、またかくのごとし。

たましきの都のうちに、棟を並べ、^{いらか}豊を争へる、高き、いやしき人の住まひは、世々を経て、尽きせぬ物なれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家はまれなり。

或は去年焼けて今年作れり。或は大家ほろびて小家となる。住む人もこれに同じ。所も変らず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人が中うちにわづかに一人・二人なり。朝あしたに死に、夕ゆうぐに生るるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。

【現代語訳】

行く川の流れは、絶えることはないが、流れている水は本の水ではない。

よどみに浮かぶ水の泡は、一方では消え、一方では生まれて、同じ状態のままであり続ける例がない。世の中に存在する人、その住まいも、またこのようなものである。

(後略)



京都・鴨川



東山魁夷「年暮る」
(1968)

鴨長明略年表

久寿二年(一一五五)

下鴨神社神官の家、鴨氏の次男として生まれる。

応保元年(一一六一)

ながつぐ父長継は下鴨神社の正補宜物官しょうねぎそつかん(宮司)であった。従五位下の位階を授けられ、父方祖母の家を継ぐ。長明七歳。

承安二年(一一七二)

父他界。長明十八歳。

安元元年(一一七五)

叔父である鴨祐兼が正補宜となる。

元暦元年(一一八四)

祖母の家を追われ、妻子と離別し、鴨川近くに転居する。長明二十九歳。

建仁元年(一一〇一)

後鳥羽院に見いだされ和歌所の寄人となる。長明四十七歳。

元久元年(一一〇四)

後鳥羽院、長明を河合社の補宜にしようとするが、鴨祐兼の反対により失敗。出家し、大原に隠棲する。長明五十歳。法名蓮胤。

承元二年(一一〇八)

この頃、日野に移り、方丈の庵を結ぶ。長明五十四歳。

建暦元年(一一一一)

鎌倉に下り、三代將軍源実朝に面会する。

建暦二年(一一一二)

三月晦日、方丈記を著す。長明五十七歳。

建保四年(一一二六)

六十二歳で死す。



下鴨神社航空写真
(google mapより)

長明の出会った五つの大災害く長明の無常観く

① **安元の大火** 安元三年（一一七七）四月二十八日 長明二十三歳

○去安元三年四月廿八日かとよ、風はげしく吹きて、静かならざりし夜、戌の時ばかり、都の東南より火出で来て、西北に至る。

↓都の三分の一を焼きつくし、民部省など京都の中枢機構が壊滅

【長明の眼】

◇さしも危ふき京中の家を作るとて、宝を費やし、心を悩ます事は、すぐれてあぢきなくぞ侍る。

② **治承の辻風** 治承四年（一一八〇）四月二十九日 長明二十六歳

また、治承四年卯月のころ、中御門京極のほどより大きな辻風おこりて、六条わたりまで吹ける事侍りき。

↓竜巻が通過した場所の家はすべてこわれ、家財道具が空に舞う

【長明の眼】

◇ただ事にあらず、さるべき物のさとしかなどぞ、疑ひ侍りし。



林原美術館蔵『平家物語絵巻』より辻風

③ 福原遷都 治承四年(一一八〇)六月〜十一月

○また、治承四年水無月の頃、にはかに都遷り侍りき。いと思ひの外なりし事なり。

○帝より始め奉りて、大臣 公卿みなことごとく移ろひ給ひぬ。

○軒を争ひし人のすまひ、日を経つつ荒れゆく。家はこぼたれて淀川に浮かび、地は目の前に島となる。

【長明の眼】

◇古京は既に荒れて、新都はいまだ成らず。ありとしある人は、皆、浮雲の思いをなせり。

○西海航路図巻 福原周辺の遺跡(兵庫県立歴史博物館エマより)



④養和の飢饉

養和元年（一一八一）～二年 長明二十七、八歳

二年が間、世の中飢渴して、あさましき事侍りき。或は春夏ひでり、或は秋、大風・洪水など、よからぬ事どもうち続きて、五穀ことごとくならず。

↓戦乱により輸送路が分断され、田舎から京・農産物の輸送とだえる

↓餓死者が続出

【長明の眼】

～人の情愛、あたたかさ～

◇夫婦のうち、その思ひまさりて深きもの、必ず先立ちて死ぬ」。

◇親子では、定まれる事にて、親ぞ先立ちける」。

◇仁和寺の隆暁法印による四万人以上の人の供養

⑤元暦の大地震

元暦二年(一一八五)七月九日 長明三十五歳
マグニチュード7.4、震源地は琵琶湖北

また、同じころとかよ、おびたたく大地震ふる事侍りき。そのさま、世のつねならず。山はくずれて、川を埋み、海は傾きて、陸地をひたせり。土裂けて、水湧き出で、巖割れて、谷にまろび入る。なぎさ漕ぐ船は波にただよひ、道行く馬は足の立ちどをまどはす。都のほとりには、在々所々、堂舎塔廟、一つとして全からず。

〔長明の眼〕恐怖心と冷静な記述

◇恐れの中に恐るべかりけるは、ただ地震なりけりとこそ覚え侍りしか。

◇(余震がおさまり、月日がたてば言葉にかけて言ひ出づる人だになし。

『愚管抄』

「元暦二年七月九日 なのめならず大地震ありき、龍王動くとぞ申し。」



大日本国地震之図
寛永元年(1624)

すみにくき」の世の自覚

すべて、世の中のありにくく、わが身とすみかとの、
はかなく、あだなるさま、また、かくの「とし。いはん
や、所により、身のほどにしたがひつつ、心をなやます
事は、あげてかぞふべからず。

【現代語訳】

何につけても、この世の中がすみにくく、自分の身と住居
とが、もろくたよりにならない様は、また(以上述べてきた
ような)こんなふうなのだ。ましていわんや、住む場所によ
り、身分や境遇の違いに応じて、心を悩ますことは、一つ一
つとりあげて数えることができないくらい多い。

●夏目漱石『草枕』冒頭部分

山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。
情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかく人の
世はすみにくい。すみにくさがこうじると、安い所へ引き越
したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生
まれて、画ができる。

長明の住居の変遷

「年齢は歳々に高く、すみかは折々に狭し」

★三十代以前

祖母伝来のおそろく豪壮な邸宅

★三十代〜五十代

母屋のみ、築地はあるが門はない、河原近くの家 水難も盗賊の恐れもある場所

★五十代の五年間(出家の後)

洛北大原山中の庵

★六十代以降

解体、移動の容易な方丈の庵
(鴨川辺の家と比較すると百分の一の大きさ)

● 長明の居所

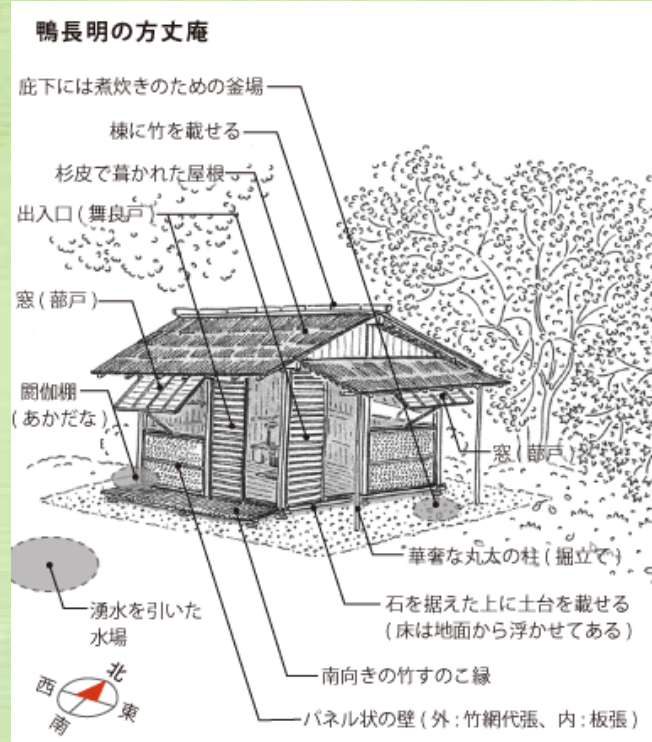
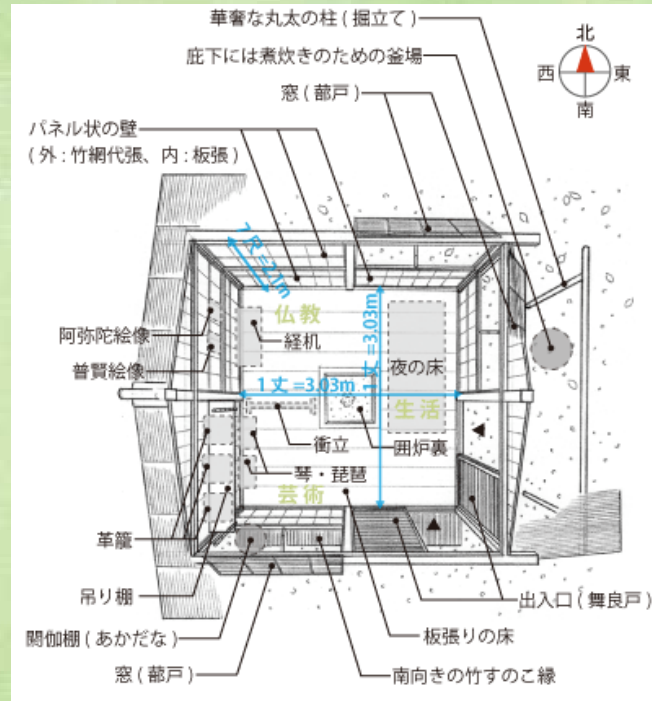


長明の庵のさま

●長明の草庵(想像図)



河合社に復元された長明の庵



草庵の風雅なくらしじぶり

●四季の景物の風情に西方浄土を思う

紫雲のごとき藤の花



死出の山路の案内をするホトトギス



はかない空蝉の世を思わせる蜘蛛



この世の罪障のように積もり消える雪



●念仏、読経は自由に休みながらする

●山守の子と木の実を取り、摘み草をして遊び、日野山から故郷の空をのぞむ

●有名歌人ゆかりの名所をたずねる

【長明の思い】

◇山中の景気、折にうけて尽くる事なし。

◇勝地は主なければ、心をなぐさむるに障りなし。

長明のライフスタイル

～手の奴、足の乗り物～

●日野の庵での五年間

都々多くの人が死に、火事で家々が焼失

庵Ⅱのどかで、不安のない生活

【長明の思い】

◇事を知り、世を知れば、願はず、走らず。

◇静かなるを望みとし、うれ々無きを楽しみとす。

←

糸竹 花月を友とする

従僕の代わりに自分で用をする

乗物の代わりに自分の足で歩く

↓常に歩き常に働くは養生なるべし

いかが他の力を借るべき

「わが身一つ」となつた時の自らのあり方を思つ長明

三界はただ心一つなり。

心もし安からずは、象馬 七珍もよしなく、宮殿 楼閣も望みなし。

仏教者として生きるとは

く暁の自問自答く

仏の教えに執心なけれ

草庵を愛することも、閑寂な趣きを好むことも執心



自分長明は姿は僧でも、心は雑念で汚れているのはなぜか？

前世の報いか、心が迷っているためか？

方丈記の末尾く答えは未だ出ない

そのとき、心さらに答ふる事なし。ただ、かたはらに舌根をやとひて、
不謂阿弥陀仏兩三遍申してやみぬ。

